ココロオドル季節

打　樋　啓　史

「ココロオドル」はnobodyknows+のヒット曲名だが、クリスマスほどこのフレーズがぴったりの季節はない。彩られた街をプレゼント片手に行き交う人々。仲間と過ごす祝いの時。暗いからこそ光が、寒いからこそ暖かい部屋が、淋しいからこそ一緒にいる人が、これほど嬉しく感じられる季節はないのだろう。でも同時にこのシーズン、自分も含めて多くの人が「心躍る」というより「心を躍らされている」と感じることもある。クリスマスに華やかさの波に乗れず楽しめなかったり、一人静かに過ごしたりするのはとんでもなく不幸であると信じ込ませる、メディアや商業主義の凄まじい力が私たちに迫ってくる。

以前ある教会で副牧師をしていたときのこと。その教会ではクリスマスイブのキャンドルサービスが盛大に行なわれた翌日、12月25日の早朝に少人数でクリスマスの礼拝がもたれていた。その礼拝後、牧師たちと教会の数名のメンバーで、長い間病院や高齢者施設にいる教会員を一日かけて訪問した。近場から遠くは京都の山奥までかなりの数の人たちを訪ね、一緒に歌い、祈り、ささやかなプレゼントを渡した。クリスマス行事の連続で、しかも前日はほぼ一睡もしていないので体の疲労は大きかった。しかしそんな疲れを吹き飛ばしてくれたのが訪問した人々の喜びようだった。なかには「本当に嬉しい」と涙を流す人もいた。病院や施設に身を置き、あの人に会いたい、あの場所に行きたいと願ってもそれがかなわない受身の日々。そんな中でクリスマスに仲間たちが「メリークリスマス！」と訪ねてくることを、その方たちは心躍らせて待っていた。そして私もそこで心躍る体験をした。訪問した側の自分が、喜びを吐露する方々と一緒にいる内に、いつしか訪問され励まされているかのように感じる不思議なひと時だった。街の華々しさとはかけはなれた場所で、それまでに見たことのない暖かく明るいクリスマスの光を見つけたのだ。

巨大な力にただ「心を躍らされる」のではなく、本当に「心躍る」クリスマスを過ごすためには何が必要なのだろう。この季節に自分自身の体験を振り返りながら少し静かに考えてみたいと思っている。

（社会学部宗教主事）